

### 3.3.1. インストラクショナルデザインの視点からのまとめ

(執筆: 鈴木克明)

インストラクショナルデザイン (Instructional Design : ID) とは、教育活動の効果と効率と魅力を高めるための手法を集大成したモデルや研究分野、またはそれらを応用して学習支援環境を実現するプロセスのことを指す<sup>(1)</sup>。日本では 2000 年頃からの e-Learning 普及とともに注目を集めるようになった用語であり、カタカナで、または ID と略されて表記されることが多い。欧米では古くから教育工学の中心的概念として広く用いられてきた。ID の視点から見ると、知的能力の育成は教育活動の成果であり、その可視化は教育活動の効果を判定し、それと同時に効率的で魅力的な達成を目指すために不可欠なプロセスと捉えることができる。

ID の視点で大学教育を点検する際には、「出口 (卒業生像) と入口 (入学生像) をつなぐ成長プロセスとして、教育理念・カリキュラム構成・科目単位認定要件の三層構造と点検・改善メカニズム」として大学を見ることになる<sup>(2)</sup>。いかなる教育システムもその大小に関わらず (4 年間の課程全体であろうと 1 時間単位の授業であろうと)、出口と入口のギャップを埋める機能として概念化することができる。大学の 4 年間にあてはめれば、どんな学生を入学させて (入口)、どんな学生として育てて輩出するか (出口) になる。一方で、1 時間の授業にあてはめれば、どんなことを知っている学生 (入口) に何を教える授業にするのか (出口) を設計することになる。

昨今の大学を取り巻く状況を眺めると、出口は徐々に厳しさを増して多方面からの要求が寄せられる一方で、入口に求められる厳しさはどんどん低落しているようで、いきおい 4 年間で埋めるべきギャップは大きくなっている。それゆえに、大学の教育力 (すなわち広がるばかりの出入口のギャップを埋める実力) が声高に叫ばれているが、出口保証と入口のオープン化がもたらす溝を埋める術を身につけることや、他大学にない独自の出口像を探ってアピールすることへの切迫感は大学によって温度差があるだろう。

出口 (卒業生像) は、大学設立の理念から導き出されることの他に、社会ニーズに応えるという使命によっても微調整が必要になる。学部ごとに関連する業界標準の動向を注視し、就職先にヒアリングし、あるいは同窓生の追跡調査などによって、敏感に出口を決め直していく柔軟性と内外への分かりやすい形での公開 (たとえばコンピテンシーリスト) が求められる。

「あなたが学んだことで就職してから最も役立ったことは何ですか (うちの卒業生のどこが魅力ですか) ?」「あなたが学ばなかったことでこれを学ぶ機会があればよかったのと思うことは何ですか (何が不足していますか) ?」このような切り口で、教育内容の社会的妥当性を探る手法は、例えば筆者が学んだ米国の大学では定期的には実施されている常套手段となっている。大学に注文を付ける役割の同窓生集団が活躍している。

一方の入口 (入学生像) はどうだろうか。入学試験の多様化が進み、「何を入学生に共通

して求めることができるのか」という問いへの確実な答えを得ることはもはや困難を極めるといふ大学もあると聞く。多様性を尊ぶのは良いとしても、そうであれば多様な出口を用意するのか(そうなると出口保証はどうするのか)、それとも多様性の中のある共通項は、四年間で全員を同一レベルに押し上げる責任として内外にアピールするのか。このことは教育責任を負う組織として、十分に考えておく必要があろう。

加えて、入口は入学試験の内容と方法の予告効果も検討する必要もある。その入試に求められる(競われる)事柄を重視して選抜することは、その実力を持っていることが入学後に役に立つ前提条件となると考えていることを内外に告知している証左である。もし、「基礎知識の多寡はこの際多少どうでも良いから、もう少し別な資質(例えば将来展望の確かさ)を求めたい」と考えているのに、相変わらず基礎知識を問う入試をやっているとすれば、それは改善の余地がある、ということになる。

さて、以上のように教育責任を出入口間のギャップを埋める行為と捉える ID の視点から見ると、本プロジェクトで取り組んだ知的能力の可視化には、さまざまな効能があると考えられる。まず、第一に、出入口の明確化を試みようとする際のツールを提供できることが挙げられる。学力ダイアグラムで知的能力を可視化することにより、誰に何を教えようとしているのかを表現する手段を共有できる。可視化は出入口の妥当性を吟味する出発点に関係者を立たせることにその意義がある。すなわち、可視化によって「この出口を目指していて良いのか」という議論が発端することになり、現行の教育を変革する必要性を確認できる効果が期待できる。可視化によって明らかになる教育成果は教育責任を全うしている証として内外に誇るデータになる一方で、可視化によって明らかになる「未達成」や「不一致」は、改善の糸口とすることができよう。

第二には、育もうとしている知的能力の種別の特定である。ID では、認知的な領域を再生的知識の習得(言語情報)、応用的な技能の習得(知的技能)、自己の学びを制御する力の獲得(認知的方略)の3つに大別し、言語情報の習得に留まらずに知的技能を核としたカリキュラムづくりとその過程での認知的方略の習得支援を推奨してきた。例えば、描かれた学力ダイアグラムで基礎知識の演繹的な習得(上向きの矢印)が偏重されていることが分かれば、それ以外の知的能力の習得を強調すべき事態が可視化されることとなり、従来から ID が推奨しているより高度な知的能力の習得が注目されることが期待できる。

第三に、同様の手法をより小規模な教育単位に分割することで、より大きな規模の出口に到達するために必要な道筋を確認し、その到達をより着実なものにする効果が期待できる。学力ダイアグラムをどの粒度で描くのか。授業時間ごとか、科目内の15時間分か、あるいはそれより大きい単位(4年間に及ぶカリキュラムなど)か。異なる粒度で描かれたダイアグラムを相互に行き来することによって、より長期の目的を達成するために必要な道筋を明らかにすることができよう。

第四に、可視化の結果を学習者と共有することによる評価活動の日常化である。ID では、教育の目標を学習者と共有することのメリットが強調されてきたが、それは、教師が何ら

かの評価を下すまでもなく、学習者自身が「できた」ことを自分で確認する術を提供することを意味するからである。すなわち、可視化されたダイアグラムを羅針盤として自らの学習を進める主体性を学習者に与え、自らの進捗を確かめながら学習を進める自律性を担保する効果が期待できる。

第五に、評価活動の日常化に伴う学習促進・進捗支援の日常化が期待できる。学習の進捗を確かめながらそれぞれが学習を進めることができれば、いわゆる指導と評価の一体化が実現される可能性があり、改めて評価の機会を別途設けなくても済むようになる。毎回の授業の成果を確かめながら次の回の授業を開始できることで出入口が明確に把握でき、最終試験に頼らない単位の認定が可能になるろう。

#### 参考・引用文献

- (1) 鈴木克明 (2005) 「〔総説〕 e-Learning 実践のためのインストラクショナル・デザイン」『日本教育工学会誌』29 巻 3 号 197-205
- (2) 鈴木克明(2008)インストラクショナル・デザイン入門 (上) (連載特集: インストラクショナル・デザイン 学士課程教育構築の方法論になるか2) 教育学術新聞 (教育学術オンライン) 第 2344 号、[http://www.shidaikyo.or.jp/newspaper/online/2344/9\\_3.html](http://www.shidaikyo.or.jp/newspaper/online/2344/9_3.html)